

ブラジル アマゾン 農協調査

北海道大学 農学部

大学院 田中规子

昨年の八月末から九月いっぱいにかけて念願のブラジルアマゾン農協調査を行った。本文はその調査についての随想である。

私のアマゾンに対する想いは高校時代に遡る。当時のNHK特集で、アマゾンの熱帯林が焼き畑によって乱開発されているとの番組が放映されたことがある。テレビの中のアマゾンの空撮はとても美しく、私はその美しさに魅了されてしまった。その映像は、熱帯林の減少がとても憂すべき事態のように思わせたのである。そうしてアマゾンの光景は私の脳裏に留まり、漠然とではあるが理想的なアマゾンの農業「開発」とは何かという疑問が芽生えたのである。そして、アマゾン農業を支える組織として協同組合の可能性を追求しなかった。

今回、調査に選んだトメアスー村のトメアスー総合農業協同組合（以下C.A.M.T.A・注①）は、ブラジルアマゾン地域に属す。ブラジルのアマゾン地域はパラ州、アマゾンナス州など一〇州（注②）からなり、トメアスーはパラ州

にある。州都ベレンからは車で四〜五時間かかるアマゾンの「奥地」である。今でも熱帯林の陸の孤島である。途中アマゾン川によって道路が分断されているためバルサと呼ばれる河渡しがある。これは一時間に一回運行、河渡しの所要時間は一分である。このため、それより「奥地」は道路も未舗装で物流など著しく遅れている。トメアスーの場合それゆえの「奥地」といえるだろう。

トメアスー村は一九二九年、鐘が淵紡績が母体となった南米拓殖株式会社によって開拓された。アマゾンの日系移民はここから始まったのである。当時のアマゾンは伝統的な或いは粗放的焼き畑農業しかみられず、農業開発、特に農法的に著しく遅れていた。そのようななかで、どのような作物が栽培できるのかも分からずに開拓が始められた。それは苦闘の道なのであった。商品作物の栽培に失敗し、さらにマラリアなど風土病も猛威をふるった。マラリアでの死亡者は相当な数で、棺桶をつくつ



▲河渡しのバルサ

てもつくつても間に合わなかったという。そして一九三五年には南拓の経営は完全に失敗し、入植者を残してアマゾンから撤退したのである。残された人々は協同組合に力を結集して生き延びるほか手だてはなかった。この協同組合は南拓撤退の三年前に設立された野菜の販売組合である。南拓の指導したカカオ栽培に見切りをつけた入植者は、ベレン市で野菜を販売して生活の糧を得ようとした。当時のブラジルでは野菜を食べる習慣がなかったため、売りながら食べ方を説明し、売れ残りは施設や軍隊に寄付した。それから数年間は野菜の生産販売が主であったが一九四〇年頃から徐々にコシヨウの生産量が伸びてきたのである。

このコシヨウ栽培の成功こそがトメアスー村の窮状を救ったのである。さらに戦後は、東南アジアのコシヨウ輸出国が戦禍で輸出货量が大幅減少したため、コシヨウの値段は数十倍にはね上がった。こうして迎えたコシヨウブームによって経済は潤い、トメアスーはコシヨウで熱帯農業の成功を収めた。

そして、常に協同組合がトメアスー農業の中心であり、村の中心であった。トメアスー村の成功を支えてきたのは、協同組合であることは間違いない。このことから私は熱帯農業、アマゾン農業における協同組合の役割が分かるのではないかと考えたのである。

しかし、そのCAMTAは最近経営が芳しくないと言き、今回の調査の目的はCAMTAの現状を知ることだった。

サンパウロ、ブラジリアを経てベレンについたのはもう九月の半ば過ぎだった。河口の街ベレン市は人口一九九万人のアマゾン地域最大の都市である。ここは様々なアマゾン川沿岸の産物が集められ売買される場所である。市場には大ナマス、最大の淡水魚ピラルクー、様々な熱帯果樹、それにアマゾンで捕獲されたナマケモノやオウムまで売られている。ここに来ればアマゾン上流でなにが捕れるのか一目瞭然である。また、この街は河口であることから輸出港も有している。一九世紀のゴムブー



▲健康な成木のコショウ園

△時代にはアマソンの天然ゴムはここに集められ、そして輸出されていた。今はトメアスーのコシヨウもここから北米へ輸出されている。トメアスーにとつて重要な市場であるばかりでなく輸出拠点でもある。

ここからトメアスー村へはバスで向かった。ジャイカヘレン支部の須藤さんの見送りを受け、午後二時頃トメアスー行きバスに乗り込んだ。ヘレンをでたときは雨が降っていなかったが、郊外にでると降り出した。例年通りだと九月は乾期の真つ最中だから雨は一滴も降らないはずだが今年はまだ毎日降っているという。アマゾンも異常気象らしい。夕方には前述のバルサの所へ着いた。その頃には雨は上がっていた。簡単な店で椰子の実、ジュースを飲みながら次のバルサが出るのを待つこと小一時間。夕涼みをしながら待つが、さすがに時間を持て余す。バルサが出た頃はもう本当に暮れかかっていた。この様な中距離バスは非常に安いので、利用者は地元のブラジル人や労働者風の人達が多く、

まず外国人旅行者が乗ってくる代物ではない。この路線は金持ちの乗るバスではないから、まずないと思うがバスジャックもよくあるらしい。そのうち、全く夜になり、バスは轟音をたてて真つ暗な熱帯林の道をモウモウほこりをたてて突き進んだ。結局到着したのは夜一〇時、心細かっただけに迎えがとてもうれしかった。

次の日、トメアスー農協へ行つて私はシヨックを受けた。なんとつい二カ月前に農協が潰れかかっていたのである。その要因は主に三点ある。

一つはインフレである。ブラジルのインフレはすさまじい。八〇年代に入ってインフレは高進し、八〇年代後半から九〇年代にかけては月四〇%〜八〇%、年間一〇〇%を超えるインフレだった。また、慣性インフレとも言われており、その証拠にブラジルの公衆電話では、一〇円玉の代わりに、フィッシャとよばれるコインを購入して使う。なぜならインフレで料金や貨幣が代わる度に、公衆電

◀ 熱帯果樹のマラクジャ



話のコイン投入口を変えるわけにはいかないからである。タフシーに乗ると、メーターの料金換算表が用意してある。相手が外国人だと解ると、知らないと思つて騙す運転手もいる。しかしそんな中でブラジル人は平気で暮らしている。ブラジルでは「インフレ文化」といわれるほど高インフレ下での生活が染み着いている。

それには、情報や経済の動きに機敏に反応し、インフレを乗り切るテクニツクが必要とされる。トメアスー農協の経営陣には一世が多く、日本人には、そのようなブラジルの感覚が身につけていないかつたようである。そして、期を逸するとそれだけで大損を被る。

第二に政策的要因である。主にここで関わる政策は農業融資政策と協同組合政策である。政府の農業融資額は八〇年代後半から削減されはじめ、九〇年に大統領に就任したコル政権下で著しく削減された。これは、インフレの主要因の一つと考えられている財政支出を抑えるためである。このためコル政権下では農業融資が一番

の槍玉に挙げられたのである。九〇年の融資額は八九年の五七％にすぎない。

また農業融資には利子プラスインフレ価値修正がついている。そのため、八〇年代末からの高インフレ下ではものによつては、一年で借りた額が五〇倍になった」という話も聞いた。この融資で借金が返せなくなり、出稼ぎへと出向いた人々も多かつた。

CAMTAでは、組合員への貸付や保証人を安易に行つていたため、CAMTAもインフレ下で雪だるま式に膨らんだ負債を抱えてバンクしてしまつた。この安易さは七〇年代の農業政策を考えるとうなずける部分もある。この期には、利子は比較的高く設定されていたが、インフレに対する価値修正がついてなかつた。そのためインフレ下でどんどん借りの額は目減りしていったのである。大型トラクターを買うために借りた金額が、数年経て返すときにはタバコ一箱代にも満たなかつたという嘘のような話がいたるところで聞かれ、昔は良かつたと農家はいう。



▲熱帯果樹のアセロラの木

この記憶が、いつか政策が代わって良くなると楽観視させる。七〇年代はインフレを容認しても経済成長を促進する政策をとっていたのである。つまり、大きな財政支出によってインフレが起ころつても、それ以上に経済成長すれば良いというものだった。七〇年代はそれによって高度経済成長を遂げだし、農業融資額も膨大だった。しかし、八〇年代後半以降は野放しにはできないほどインフレは高進し経済も停滞している。

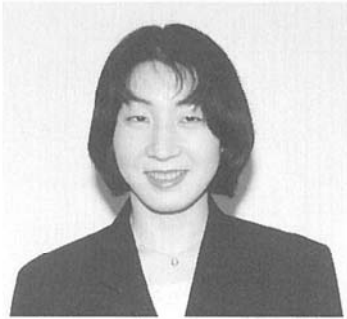
ブラジル農業政策局の中には農業協同組合部があり、農協から意見を取り入れながら農協と共に歩み、農協を支援することによって農協が農業のエンジニアとして活躍することを期待する」と、部の目的を農業協同組合部のウルフ氏は語った。

実際、協同組合部では、開発政策の担い手として協同組合を設定し、低利融資を行っている。しかし、金額的には非常に少ない。また、日本の農協のように税制優遇がなく、ブラジルの農協はあくまで自由競争下におかれている。支

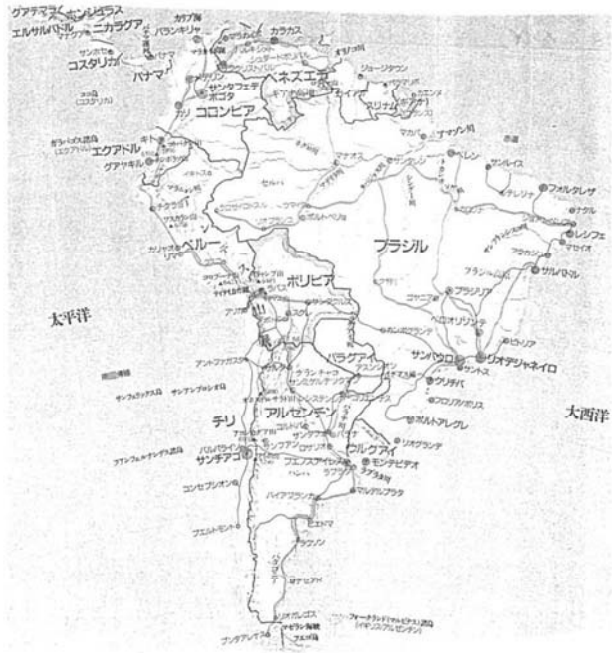
援はするが、保護はしない。このように高インフレ下でブラジル協同組合をとりまく政策的背景は厳しいものがあつた。

第三に、主作物であるコシヨウ栽培の停滞である。コシヨウ栽培の成功によってトメアスーの熱帯農業は成功したかに見えた。しかし、それには大きな欠陥があつた。コシヨウに病害が蔓延したのである。コシヨウはもともと蔓性の植物であり、日陰を好む。それを日当たりの良い場所で栽培すれば、初めのうちは単収はあがるが、弱い成木をつくってしまうせいだとも言われている。また、化学肥料の多用のせいとも言われる。いずれにしても熱帯農業としての農法的欠陥の発露といえよう。この傾向は六〇年代の後半からみられたが、いまだに未解決である。

また、コシヨウ栽培に見切りをつけようにも適作物が容易に「発見」できない。野菜など、ベレン市場向けは近郊農家との競争に破れていった。八〇年代後半からは熱帯果樹を中心としたジューズ生産が始められたが、生産もCAM



田中 規子 (たなか のりこ) さん
 1967年京都市生まれ。1991年酪農学園
 大学酪農学部卒業。1993年北海道大
 学農学部大学院入学。現在、同学部大
 学院在学中。



しかし、明るい材料がないわけ
 ではない。第一に、熱帯果樹につ
 いてはCAMTAが販売戦略にお
 いて失敗していたため成功には至
 っていなかったが、販路があり、
 栽培方法にも大きな欠陥があるの
 ではない。第二に、インフレは九
 四年の選挙で選ばれたカルドソ
 現大統領がレアルプランを九四年
 七月から行い、それによってイン
 フレがおさまっていること。第三
 に、CAMTAの経営陣である理

TAの販売も軌道に乗っていると
 は言い難い。本当にアマゾン農業
 の難しさを思い知らされる。
 しかし、アマゾンの農業者は生
 産においても販売においても遅し
 くあらゆる方法を試みている。そ
 のような人々が、インフレ下で経
 営に失敗したCAMTAを見捨て
 ようとしていることも経営危機の
 要因であった。
 経済の安定しないブラジルで、
 しかも政策のバックアップがない
 状態で協同組合を経営するのは難
 しい。加えてアマゾン農業の難し
 さは容易には解決できない。

(注1)ポルトガル語の正式名称は、
 COOPERATIVA AGLICOLA MISTA DE T-
 OME-ACUで、これを略してCAMTA(=カ
 ンタ)と呼んでいる。

(注2)アマゾンの地域開発推進政策のため、
 「法定アマゾン」地域が定められている。
 北部のパラー州、アマゾナス州、アマバ州、
 ロライマ州、アクレ州、 Rondônia州と中西部
 のマトグロッソ州、トカンチンス州、北東部のマ
 ラニョン州からなる4,906,784km²の地域を指
 す。

事は七月の経営危機時に入れ替わ
 り、日丞二世、準二世の理事を多
 用し経営陣の若返りを計ったこと
 である。
 私は、どういうわけかアマゾン
 へ行くたびに好きになる。強い
 日差しの中でも木陰は涼しく、川
 辺でほんやりしていると青や黄色
 に光る蝶が舞う。トメアスー村はア
 マゾン河でも白い砂と澄んだ水面
 をたたえる所である。夜になると
 日本の秋のように虫が声を震わせ、
 昼間の暑さが嘘のようになる。
 アマゾンが乱開発を免れ「持続
 可能」な農業が行われることを私
 は願う。